

第 6 回多文化医療研究会

6th Research Meeting of the Japanese Institute for Multicultural Health

日時： 2019 年 6 月 22 日（土） 13:00-18:00

場所： 長崎大学 熱帯医学・グローバルヘルス研究棟 1 階大セミナールーム

主催： 一般社団法人多文化医療研究所

協力： 長崎大学熱帯医学研究会

Date: June 22, 2019, 13:00-18:00

Venue: Nagasaki University, Global Health General Research Building
1st floor Seminar room xx

Organized by the Japanese Institute for Multicultural Health

Collaborated with a study group working on Tropical Medicine of
Nagasaki University

第6回多文化医療研究会

会場案内

グローバルヘルス総合研究棟は、坂本キャンパスのもっとも奥にあります。キャンパス正門から入ったら、守衛室横のマップに従って熱帯医学研究所をめざし、そのさらに奥にある真新しい5階建ての建物を見つけてください。



アクセス

- 路面電車「原爆資料館駅」より徒歩10分
- JR「浦上駅」より徒歩20分、タクシー5分
- JR「長崎駅」よりタクシー15分



第6回 多文化医療研究会 プログラム

13:00 開会挨拶

神作麗（一般社団法人多文化医療研究所 代表理事／順天堂大学）

13:10-14:50 研究発表（一般演題、質疑応答含めて25分）

13:10-13:35

日達真美（長崎大学医歯薬総合研究科）

「5歳未満児の養育者に対する栄養カウンセリングの効果の検討：アフリカモデルの構築」

13:35-14:00

猪狩友美（長崎大学多文化社会学部）

「複数の医療システムを渡り歩く患者：ベナン南部におけるブルーリ潰瘍患者を取り巻く多様な環境と治療希求」

14:00-14:25

野口真理子（京都大学アフリカ地域研究資料センター）

「エチオピアの農村におけるケア実践の社会的基盤についての一考察」

14:25-14:50

見原礼子（長崎大学多文化社会学部）

「多文化社会におけるセクシュアリティ教育の課題：オランダの事例から」

(14:50-15:10 休憩)

15:10-18:00

シンポジウム 医学部生が見た医療の現場 キャンパスの外のまなび

15:10-15:20

増田研（長崎大学） 趣旨説明

15:20-15:45

銚立春響（一般社団法人STUDY FOR TWO 学生代表／日本国際保健医療学会 学生部会／九州大学医学部）

「途上国の現状から見たこと～様々な海外での活動に参加して～」

15:45-16:10

野原ひかり・建部都志子・吉原七海・日高悠介（長崎大学熱帯医学研究会／
長崎大学医学部）

「海外研修を通して見えたもの：長崎大学熱帯医学研究会（熱医研）の取り組みから」

16:10-16:35

今泉和佳・根岸珠久・得能正史（熊本大学国際社会医療研究会）

「宗教×医療：スタディーツアーを通して見えたこと」

16:35-16:55

杉下智彦（東京女子医科大学） コメント

16:55-17:45 総合討論

17:45 閉会挨拶

18:30 懇親会（長崎市浜口町を予定）

一般演題 1

5 歳未満児の養育者に対する栄養カウンセリングの効果の検討: アフリカモデルの構築

日達 真美
長崎大学

背景・目的：子どもの栄養失調は、身体・知能の発達を阻害し、短期的のみならず長期的影響を及ぼす。その解決には、養育者による持続的な適切な給餌行動等が必要である。本研究では、養育者を対象として子どもの栄養に関する教育とフォローアップを行い、乳幼児の栄養状態への効果の評価を行う。さらにこれらの結果を用いて、アフリカにおける新たな小児の地域栄養改善モデルの構築を試みる。

方法：ケニア共和国クワレ郡に住む 5 歳未満児とその養育者それぞれ 700 組を対象とする。350 組を介入群として、トレーニングとフォローアップを行い、子どもの栄養状態への効果を評価する。これまでの結果：介入前調査では 691 組（98.7%）の対象者に対して調査を行い、30.1%が stunting(発育阻害)、6.9%が wasting（消耗症）、16.0%が underweight（低体重）であった。その後、養育者へのトレーニング、フォローアップを行った。

今後：介入後調査を行い、介入効果を評価していく。

一般演題 2

複数の医療システムを渡り歩く患者

-ベナン南部におけるブルーリ潰瘍患者を取り巻く多様な環境と治療希求-

猪狩 友美

長崎大学

ブルーリ潰瘍は、手足への潰瘍形成を特徴とする抗酸菌感染症であり、顧みられない熱帯病の一つに位置づけられている。ベナンでの新規症例数は近年減少傾向にあり、2017年には267件だった。しかし、ブルーリ潰瘍センターを受診した患者でも、重症度が上がるまで受診に至らないケースが半数以上を占めている。患者を取り巻く環境は、多元的・多層的に存在する複数の医療システム、社会・経済的要素、伝統・文化的価値観、家族や周囲との関わり、ブルーリ潰瘍の性質など、多様な要素によって成立しており、患者は、それらの組み合わせによって治療希求を行なっている。その結果、患者/介護者は複数の医療システムを渡り歩く多元的な治療希求によって「治ること」を期待するのだ。

本発表では、患者の個別のケースの検討を通して、彼らの治療希求と背景に焦点をあて、医療従事者側の望む行動とのずれを明らかにする。

一般演題 3

エチオピアの農村におけるケア実践の社会的基盤についての一考察

野口 真理子

京都大学アフリカ地域研究資料センター

エチオピアの農村においては、介護を必要とする老人はまだ少ない状況にある。しかしながら、農業を生業とする調査地域の農村において、身体能力の低下を自覚する老人は日常生活のあらゆる面で他者のサポートを必要とする。そこでは、こうした日常的なサポート・協力関係が老人ケアの大部分を担っているといえる。本発表では、エチオピア南西部の農村に暮らす老人の生活にかかわる、親族関係や信頼関係に基づいたサポート、共同労働、金銭を介した労働力の売買、その場その場での応答的対応など、ローカルなケア実践の社会的基盤について整理する。特に若者を始めとする人口の移動などに起因する社会的構造の変化の影響について、今後の展望とともに示したい。

一般演題 4

セクシュアリティ教育の実践において文化の多様性をどのように考慮するのか
——オランダの事例から

見原 礼子

長崎大学多文化社会学部

近年、セクシュアリティ教育の重要性は国際社会において改めて認識されつつある。「性と生殖に関する健康・権利」概念の広まりによって、ウェルビーイングの源泉としてのセクシュアリティへの関心が示される一方で、子どもたちを取り巻く環境においては性的虐待や性的搾取が深刻な問題として捉えられており、インターネットにおける性的コンテンツの流通も加速化している。こうした状況の中で、年齢に応じた科学的根拠に基づくセクシュアリティ教育（Sexuality Education）の提供は、性の健康を実現するうえで不可欠なものともみなされている。

セクシュアリティ教育は、セクシュアリティの身体的側面のみならず、情緒的・社会的側面にかかわる学びも含む包括的な教育として定義づけられている。では、セクシュアリティ教育を推進する社会が多文化的であるとき、社会の構成員の異なる文化的・宗教的価値観はどのように考慮されるべきなのか。移民や難民の受け入れにともない、異なる文化・宗教集団を包摂してきたヨーロッパでは、近年、とりわけ性的指向・性自認の多様性とのかかわりの中で、この課題が俎上に乗せられてきた。本発表では、ヨーロッパのセクシュアリティ教育における争点を特にオランダを事例としながら整理し、文化の多様性を踏まえたセクシュアリティ教育の課題を考察する。

第2部 シンポジウム

医学部生が見た医療現場—キャンパス外のまなび

参加団体：

- ・一般社団法人 STUDY FOR TWO 学生代表／日本国際保健医療学会学生会
会／九州大学医学部
- ・熊本大学国際社会医療研究会
- ・長崎大学熱帯医学研究会／長崎大学医学部

コメンテーター：杉下智彦（東京女子医科大学）

シンポジウム 発表1

途上国の現状から見たこと ～様々な海外での活動に参加して～

銚立 春響

九州大学医学部医学科4年

一般社団法人 STUDY FOR TWO 学生代表/日本国際保健医療学会 学生会

本発表では、私が所属する学生団体での渡航経験および学外活動への参加を通して、実際に途上国へ足を運び、目にしてきた医療や教育への取り組みから、自身のキャリア形成の上でどのようなことに注意しながら今後の学生生活を歩んでいけば良いのか、気づいたことなどについて述べる。参加した主な活動は、バングラデシュでの女子教育プログラムの現地訪問、タイでの母子手帳国際会議、カンボジアでの Japan Heart の病院見学の3つである。

バングラデシュでの女子教育プログラムとの出会いは、自身が代表も務める、一般社

団法人 STUDY FOR TWO での活動であった。弊団体は、教科書のリユース事業によって資金を集め、ラオスとバングラデシュへ教育支援を行っている。その支援は、国際 NGO である Room to Read のプログラムの一つである女子教育プログラムを通して行われており、今回は実際に支援を受けている子どもたちと直接会い、家庭訪問も行った。そこでの生活の貧窮具合や、社会保障制度の不安定さ、医療のアクセスの弱さなどを目の当たりにしたと同時に、教育が与える国力の向上への影響力に関して、所感を述べる。

タイでの母子手帳国際会議への参加に関しては、所属の日本国際保健医療学会学生部会でもお世話になっている中村安秀先生からのお声かけによるものである。会場では本シンポジウムのコメンテーターでもある杉下智彦先生にも大変お世話になった。この国際会議には、29 の国と地域から各国の保健医療に携わる方々が 447 名参加し、母子手帳を通じて母子保健の向上をどう広げていくかについて、非常に多くの側面から議論がなされていた。そこで直接お話を伺った各国の方々からの現状に加えて、母子手帳の持つ可能性やこれからの国際保健のあり方に関して、所感を述べる。

最後に、カンボジアでの Japan Heart の病院見学は、自大学である九州大学出身であり、当時カンボジアで医療ボランティアの医師として働いていた進谷憲亮先生を尋ねる形で、病院見学を特別にさせていただいた。それ以外にもカンボジアの大学や企業を訪問する中で、カンボジアの教育と医療の制度の脆弱性を強く感じるとともに、これまでの種々の国にそれぞれ特徴があり、対処方法も多様であると感じたため、全体総括として自分自身の将来にも触れながら述べる。

シンポジウム 発表 2

海外研修を通して見えたもの：

長崎大学熱帯医学研究会（熱医研）の取り組みから

野原ひかり・建部都志子・吉原七海・日高悠介
長崎大学熱帯医学研究会

長崎大学熱医研は国際医療をはじめとする国内外での活動に興味のある仲間が集まり、いくつかのプロジェクトに分かれ各人の興味の実現に向けて活動を行なっている。本発表ではそれぞれ 3 つの経験を紹介することにより、海外研修を通して見えたこと、学びについて検討していきたい。

ケニアでのマラリアに関するフィールドワークに参加して

長崎大学医学部看護科2年 野原 ひかり

2019年3月に私は皆川先生の伝手を頼り、医学科2年の山下とケニアを訪れた。アフリカは自分にとって、ずっと憧れの場所であり、長崎大学を決めたきっかけも、アフリカとの繋がりがあるということだった。実際にケニアに行き、現地の人々が生活している家々を回ったり、保健所や病院、現地の学校で、マラリア検査のお手伝いさせてもらうという経験も出来た。自分が、ケニアで見たものはどれもとても新鮮で、貴重な体験となった。

熱医研でのフィリピン研修を通して学んだこと

長崎大学医学部医学科3年 建部 都志子 吉原 七海

長崎大学熱帯医学研究会に所属する医学科/看護学科の学生5人は、2018/9/6~9/14の期間で、フィリピン・マニラ研修を行った。行政と臨床現場の2つの視点から、途上国の公衆衛生や医療環境の現状を学ぶという目的のもと、WHO オフィスと貧困地区にある母子クリニック、さらに感染症を専門とするサンラザロ病院を訪れた。サンラザロ病院には長崎大学との共同研究室があり、現地で行われている研究も見学することができた。さらに縁があり、University of Manila の医学部生や研修医との交流機会もあり、彼らの案内で大学病院も見学することができた。臨床医学の学習前に途上国医療を見学できたことで、多くの学び・反省点を得ることができたように思う。

熱医研での活動とチュラロンコン大学臨床実習

長崎大学医学部医学科6年 日高 悠介

長崎大学に編入してきて5年間、とくに3年時にこの熱帯医学研究会を先輩らと立ち上げた後は海外での研修活動に参加・企画してきた。熱医研では海外活動として3年時にフィリピン・マニラへの研修チーム運営/母子医療研修チーム参加、4年時にベトナム・ハノイの研究拠点への研修チームに参加してきた。そして今年5月には、それらの経験を生かして医学部のプログラムとしてタイのチュラロンコン大学の小児科へと臨床実習生として派遣された。今回の発表では、6年生として海外臨床実習に参加したいま、低学年時に参加・企画した研修がどのように今につながったか、これまでを振り返って話したい。

シンポジウム 発表3

宗教×医療～スタディーツアーを通して見えたこと～

今泉和佳、根岸珠久、得能正史
熊本大学国際社会医療研究会

ラグビーワールドカップや女子ハンドボールの世界選手権が熊本において開催されることに伴い、訪日外国人が増加されることが予想されている。それにともない、そのような訪日外国人が滞在中に、患者として医療機関を受診することが十分に考えられ、日本の医療体制が急激な外国人の患者増加を受け入れることができるのか、またトラブルが多発するのではないかと懸念されている。このような状況のなか、私たちは、彼らの文化的背景と日本人の価値観の相違を理解することがトラブルの減少につながると考え、昨年度、宗教と医療にスポットを当てて学ぶことにした。

本発表では、以下の3つの項目に焦点を合わせたい。第一に総勢30名弱の部員で構成された熊本大学の国際社会医療研究会について紹介する。第二に、昨年度の国際社会医療研究会の課外活動の概要を紹介する。熊本大学では昨年度、「第11回きらめきユースプロジェクト」という企画がとり行われ、大学のバックアップのもと2018年の8月21日から23日にかけて東京の宗教関連施設におけるスタディーツアーを実施した。またそれと並行して熊本県における宗教施設や医療施設を訪問し、学習を進めた。

発表では最後に、部員が現場を見に行くことの意義を考察したい。私たち医学生は普段の授業でさまざまな医療的な知識の習得に努めているが、他方で、多分野を学ぶ機会はなかなかなく、ましてや今回のような宗教施設の見学を個人的に行うことは難しい。実際にそのようなキャンパス外の現場に赴くことで、私たちの考えていたこととは違った見方を見つけることができた。その意義について発表したい。